

ヒサ先生へ

どうしよう、ヒサ先生。申し込まれました…結婚(°O°)。

嬉しいんです(´0`)！けど…

学生時代からの付き合いの先輩なんですけど…ただ、私はまだ、研修はじまっただばかりだし、自分の将来がはっきりしないし、彼は外科で忙しいし、大学の医局人事で毎年どこいかわからないし…(´へ`);。結婚したら、自分の夢はどうなるのか…(´△`)。家事をしたりとか子供の世話したりとか、とっても大事なことだし…(´.´)

なんか女の人ってちょっと大変ですよネ、どうしよう…悩んでいます…(´~´)

ヨウコより

このコーナーでは、カナダ・トロント大学へ臨床指導医研修を受けに留学中のDr.Hisaと新米研修医Dr.ヨウコとの交換E-mailをご紹介します。

ドクター☆Hisa

長崎医療センター・教育研修部に所属。

Dr. Hisa

He is a doctor from Japan currently studying Canadian primary care and medical education system. He enjoys having many kinds Beers and jogging when it's -20°C outside.

>家事をしたりとか子供の世話したりとか、…なんか女の人ってちょっと大変ですよネ

そうだね、かなり大変！今、僕は妻が事情で日本に帰っているの、大学と病院と二人の子供の世話…目が回る！

僕は朝6時に起きて弁当をつくり7時半には小学校へつれてゆく。娘たちが通うトロントの小学校はデイケア(学童保育)が校内にあり、朝と夕方は6時まで有料であずかってくれる。6時以降に仕事が入っているときは、ナニー(ベビーシッター)を頼んで、迎えにってもらい、家で世話をしてもら(カナダは子供だけで留守番させるのは法律違反となることがある)。帰ると、子供の宿題をみて、食事をつくり、洗濯をしたり、その後自分の宿題にかかる。仕事しかなかった典型的な日本のオジサンは、いかに女性が大変かを

泣きながら体験している。そしてカナダの女性の医師達と同じように頑張っている姿に初めて気づいた。ただ、日本との大きな違いがいくつかある。子供の送り迎えする父親、買い物する男性、家事をする男性はまったくめずらしくない。Nateに聞いてみると「もちろんそれぞれの家庭によるんだけど、一般的には家事も男女平等だね、90%以上共稼ぎだからね」Nateも週3回は台所に立つという。「デイケアや育児休暇などの社会システムは日本より整備されていると思う。」

>結婚したら、自分の夢はどうなるのか…

Dr. Pauline PariserやDr. Kylie Boothの生き方は、ヨウコにとってきつといい参考になると思う。

僕は毎週1回、ダウンタウンのDr. Paulineのオフィスへ行っている。Paulineは心理学のmasterまでとり、医学部へ進み家庭医となり開業して10年になる。「結婚して子供が小さいときは大変だったわね、だけど、家庭医としてはね自分の家庭を持つことも大事と思ったのよ」そう言って微笑むPaulineは、患者さんからの信頼も厚い。こちらへきてびっくりしたことのひとつに家庭医は、ひとつの家族全員を診る。その子供が大きくなり結婚した場合など、その家族まで診ることも

ある。「楽しいわよ、親が年取ったり、子供が成長したり、その間にさまざまな家族のイベントがあってネ、私は幸せよ、やりたいと思った仕事をしているしね」彼女は、そういつている間に何本かの電話にでて、患者さんからの相談を受ける。じっとしてない、患者さんからの手紙や写真がたくさん張ってある自分の部屋と診察室と待合室をつねにぐるぐる回り、お昼はサンドイッチを頬張りながらカルテを書く。「彼はもう少し勉強しないとね」と高校生の息子を気にかけ母親の

顔になり4時にはオフィスを閉め家へ戻る。「タイムマネージメントは大事よ」とPaulineはKylieへ教える。「時間の使い方こそあなたの人生そのものよ」

>彼は外科で忙しいし、大学の医局人事で毎年どこいかわからないし…

5年前長崎で研修して、研修医同士で結婚したタカハシ夫妻が先日カナダに遊びに来てくれた。夫は沖縄で臨床、妻はアメリカで研究の生活が1年続いているそうだ。お互いに支えあい、夢を大事にして頑張っている二人を見て、うれしかった。ヨウコ、君にもできるよ！

Dr. KylieはToronto Woman Hospitalの家庭医学科の2年目の研修医でチーフレジデントをしている。「最初は、外科志望だったんですけど、学生実習で僻地へ行って、そこで働く家庭医をみてびっくりしたんです。なんて仕事の幅が広いんだらうって。」彼女は忙しい研修の合間に、週に半日だけPaulineのオフィスで実習している。大きな病院ではできない研修がここにはあると彼女はいう。実際に、Paulineは、女性としてどういうふうに仕事をしてきたか、これから始まる若いKylieへアドバイスする。ある時など、どういう秘書(受付)を雇いどういふオフィス経営をしたらいかを、自分の秘書を交えて失敗体験などを話していた。「Kylie、要は、バランスなのよ。仕事と家庭、仕事と自分、夢と現実…すべてはバランスの上にあなたの人生はあるのよ」好奇心旺盛で賢いKylieの夢は自分の家庭を持ち、家庭医として救急や産科を病院でしながら、オフィスを持つ。一見、日本人の目からすると無茶なような気もするが、そういう女性医師を実際何人もみた。決して彼女たちがスーパーウーマンではなく、働く女性を支援するシステムと男女が仕事の上で平等という考え方の上で、彼女が「やりたい」と言えば、やれる国、選択できる国である。Nateはいう「女性の立場は強くなっているのは確かだが、まだまだ厳しい面もある。仕事上、上へ行けば行くほど、競争は厳しく、まだまだ男社会だ。給与の男女格差も上へ行くほど



ど広がる。」そして、働く女性とは直接的には関係ないかもしれないが、カナダの離婚率は50%、離婚に伴う子供の精神的肉体的な問題も大きな社会問題となっている。

「バランスは大事ね」とKylieも言う。友達たちとホッケーをしたりボランティアをしたりするKylieは研修終了後、アメリカの病院のERへ武者修行へしばらくでるといふ。自分の生活を大事にしつつ、仕事でも成功しようとする北アメリカのconceptは男も女も変わらない。

>結婚、嬉しいんです！けど…

カナダ人なら、君が「けど…」と言いつ終る前に、Congratulation! Great! Beautiful! It is good for you!と、たたみかけるように祝福するかもしれない。ポジティブな面を見て楽観的に生きてゆくことは、この複雑な混沌とした社会の中では必要なことかもしれないよ。ヨウコ、前を向いて、歩いてゆけ! You can do it!